



羅生門

Rashou mon

芥川 龍之介

Ryunosuke Akutagawa

Raptor

羅生門

羅生門
芥川龍之介

羅生門

ある日の暮方の事である。一人の下人げにんが、羅生門らしょうもんの下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗にぬりの剥はげた、大きな

円柱まるばしらに、蟋蟀きりぎりすが一匹とまっている。羅生門らしょうもんが、朱雀大路すざくおおじにある以上は、この

男のほかに、雨やみをする市女笠いちめがさや揉烏帽子もみえぼしが、もう二三人はありそうなもの

である。それが、この男のほかに誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風つじかぜとか火事とか饑饉とか

羅生門

云う災わざわいがつづいて起つた。そこで洛中らくちゆうのさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、その丹にがついたり、金銀の箔はくがついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪たきぎの料しろに売っていたと云う事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸こりすが棲む。盗人ぬすびとが棲む。とうとうしまいは、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へ

羅生門

は足ぶみをしない事になってしまったのである。

その代りまた鴉からすがどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何

羽となく輪を描いて、高い鴟尾しびのまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに

門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻ごまをまいたようにはつきり見

えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄ついばみに来るのである。——もつと

も今日は、刻限こくげんが遅いせい、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そ

うしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞ふんが、点々と白くびびりつ

羅生門

いているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖あおの尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面皰にきびを気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと呼ぶ当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微すいびしていた。今この下人が、永年、使われていた主

人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなく、途方にくれていた」と云う方が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の *Sentimentalisme* に影響した。申の刻下りからつね ごとしがふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をあすおいても差当り明日の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路にふる雨の音を、

羅生門

聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出したいらかの先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいるいとま 違ちがはない。

選んでいれば、築土ついでの下か、道ばたの土の上で、饑死うせいをするばかりである。そうして、この門の上へ持って来て、犬のように棄てられてしまっただけである。選ば

羅生門

ないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊ていかいした揚句あげくに、やっとこの局所ほうちやくへ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」

であつた。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人ぬすびとになるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏くさめをして、それから、大儀たいぎそうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶ひおけが欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠

羅生門

慮なく、吹きぬける。丹塗にぬりの柱にとまっていた蟋蟀きりぎりすも、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸くびをちぢめながら、山吹やまぶきの汗衫かざみに重ねた、紺あおの襖あおの肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患うれえのない、人目にかかる惧おそれのない、一晚楽いっばんらくにねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思つたからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗つた梯子はしが眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた

羅生門

ひじりづか たち さやばし
聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、藁草履わらぞうりをはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子ようすを窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿うみを持った面皰にきびのある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括くくっていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰

羅生門

か火をとぼして、しかもその火をそこごと動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣くもをかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮やもりのように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出るだけ、平たいらにしなから、頸を出るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗のぞいて見た。

羅生門

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸しがいが、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土こを捏ねて造った人形のように、口を開あいたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にごろがっついてた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、

羅生門

低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に唾おしの如く黙っていた。

下人げにんは、それらの死骸の腐爛ふらんした臭気に思わず、鼻おほを掩った。しかし、その手

は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲うづくまっている人間を見た。檜皮色ひわだいろ

の着物を着た、背の低い、瘦やせた、白髪頭しらがあたまの、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片きぎれを持って、その死骸の一つの顔を覗きこむよう

に眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸ざんじをするのさえ忘

れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身とうしんの毛も太る」ように感じたのであ

る。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた

死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱しらみをとるように、その長い

髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消

羅生門

えて行つた。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。——いや、この老婆に対すると云つては、語弊ごへいがあるかも知れない。

むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、

誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、うえじに 餓死をするかぬすびと 盗人に

なるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を

選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片きざれ

のように、勢いよく燃え上り出していたのである。

羅生門

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さっきまで自分が、盗人になる気でいた事などは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄むつらづかの太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚い

羅生門

たのは云うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるでいしゆみ弩はじにでも弾かれたように、飛び上った。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手をふさ塞

いで、ののしこつ罵ののしった。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はま

た、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、

老婆の腕をつかんで、無理にそこへじ倒した。丁度、にわとり 鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘をさや 払って、白はがねい鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、

肩で息を切りながら、眼を、めだま 眼球がの外へ出そうになるほど、見開いて、唾のようにしゅうね 執拗く黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全

羅生門

然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったあとのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。

「己おれは検非違使けびいしの庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅なわの者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようなわと云うような事はない。ただ、今時

羅生門

分この門の上で、何をして居ただか、それを己に話しさえすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じっとその下人の顔を見守った。の赤くなった、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、

ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉

のどぼとけ

で、尖った喉 のどぼとけ 仏の動いているのが見える。その時、その喉から、 からす 鴉の啼くよ

うな声が、 あえ 喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わって来た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、 かざら 鬢にしようと思うたのじゃ。」

羅生門

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑いぶへつと一しよに、心の中へはいつて来た。すると、その気色けしきが、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、墓ひきのつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。

「成程な、死人しびとの髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現

羅生門

在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸しすんばかりずつに切つて干したのを、

干魚ほしうおだと云うて、太刀帯たてわきの陣いへ売りに往んだわ。疫病えやみにかかつて死ななんたら、

今でも売りに往んでいた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云

うて、太刀帯さいりょうどもが、欠かさず菜料さいりょうに買つていたそうな。わしは、この女のし

た事が悪いとは思つていぬ。せねば、餓死をするのじやて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやりせねば、餓死をするじやて、仕方がなくする事じやわいの。じやて、その仕方が

羅生門

ない事を、よく知っていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるである。」

老婆は、大体こんな意味の事を云った。

下人は、太刀を鞘さやにおさめて、その太刀の柄つかを左の手でおさえながら、冷然と

して、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面皰にきびを

気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心に

は、ある勇気が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇

気である。そうして、またさつきこの門の上へ上って、この老婆を捕えた時の勇気

とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が完ると、おわ下人はあざけ嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきび面皰から離して、老婆の襟上をえりがみつかみながら、噛みつく

ようにこう云った。

「では、己おれが引剥ひはぎをしようと恨むまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色ひわだいろの着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

羅生門

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短い白髪をしらが倒さかさまにして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、こくとうとう黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、ゆくえ誰も知らない。

(大正四年九月)

羅生門

本作品のテキストは「青空文庫」を利用し、再編集を加えました。

羅生門 芥川龍之介／Raptor

<http://p.booklog.jp/book/34648>

著者：RaptorBooks

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/raptorbooks/profile>

表紙画像：ゆんフリー写真素材集

Photo by (c)Tomo.Yun

<http://www.yunphoto.net>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34648>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34648>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.